



TITLE:

摘録

AUTHOR(S):

CITATION:

摘録. 地球 1928, 9(2): 151-153

ISSUE DATE:

1928-02-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/183391>

RIGHT:

摘 録

ある。蘇國人は他國人から吝嗇坊だと云はれても怒らない。自ら吝嗇坊の話草を拵へて笑ひの種を製造して悦んでゐる。また男女共に勤勉である。昔はウイスキーをよく飲んだが、今日は他國に賣出す爲めに醸造しても、自ら飲む爲めに醸造しない。教育は英蘭に於けるよりも盛である。頭腦は明哲であり、冷静で沈着である。利害には遠視が利く、てなことを云つて貰めたやうなまた貶したやうなことを云つてゐたことがあつた。

扱て本題に歸つて、コーカーニーとは蘇國人の瑣事に用心深く金銭に吝嗇坊のことを云ふのである。ものの本にもあり、老人の口からも聞いた話ではあるが、どんな話が紹介に及ばう。

一蘇國人が倫敦に来て晝食をとらんとてある料理店に入つた。食卓に就くと食卓に二片の銅貨が置かれてあるのを見付けた。「勿體ない、誰か二片を置き忘れておいた。棄ておくのも無駄である」と云つて自分のポケットに入れた、註に曰く、これは倫敦では晝食に一志餘を拂ふと、給仕人にチップとして二片の銅貨を黙つておいておくのが習慣である。蘇人はそのチップの二片を失敬して自分のポケットに納めたのである。蘇人の吝嗇坊を代表する一挿話である。

この話は既に五十年前も前に E. F. Ransley が著した書物に載つてある話である。而かもその本には既に昔からある話として記載されてある處から見ると、随分昔からの話である

○森爲三 濟州島及對馬の動物分布の狀を考察して内鮮兩陸分離の時代と其の時代の狀態とを推論す(朝鮮第一五二號一四—二五頁昭和三年一月)

濟州島の動物分布を見るに先づ鳥類は其の種百十三に達するが、本島と朝鮮とに産し内地に産しないものにカウライイキジ、カラシラサギ、マミジロキビダキ、サイシウヤマガラの四種がある。就中カウライイキジが居ることは朝鮮に近い事を示す有力な證據である。又濟州島と内地とに産し朝鮮に産しないものにウグヒス、スズメ、イイヅマホホジロ、コカハラビハがあるが何れも其の近似亞種が朝鮮に産する。濟州島には兩棲類七種爬蟲類七種ある。うち本島特産種と認むべきものはサイシウサンシヤウリチだけで其に近いものは朝鮮のテウセンサンシヤウリチと對馬下島のキタツシマサンシヤウリチで九州のアチサンシヤウリチは縁の遠いものである。濟州島と朝鮮とに産して内地に産しないものには兩棲類にアカハラカヘル、メンコンカヘル、テウセンヒキカハルの三種があり、爬蟲類にスベトカゲ、シロスチガナヘビ、サラサヘビ、キスジヘビ、テウセンマムシの五種がある。而して濟州島と内地とに産して朝鮮に産しない種類は見當らず、他は悉く内鮮濟州島共通種である。故に濟州島の兩棲及爬蟲類は明かに朝鮮

系であつて内地とは大に違ふ。殊にアカハラカヘル、メンコンカヘル、シロスチカナヘビ、サラサヘビ、キスシヘビの如き大陸性のものが朝鮮より濟州島まで延長して居るのは濟州島が朝鮮半島から分離した事の遠い時代でないのを現はしてゐる。濟州島には五百二十七種の昆蟲を産する。其の内、本島特産十五種、濟州島と朝鮮とのみに産するもの二十九種、濟州島と朝鮮滿洲に産し内地に産しないもの五十五種、濟州島と内地とに産し朝鮮に居ないもの僅かに五種で、其の動物分布が朝鮮系であることを明に示して居る。以上を總括すると濟州島の動物區系は全然朝鮮系のもので内地系とは縁が遠いと推斷し得る。

次に對馬の動物分布を見るに朝鮮分子と内地分子と混じて此に特異の對馬動物區系を構成し、其の混系の割合から見れば其の區系が稍朝鮮に近いのを示して居る。之を各類に就いて論ずれば次の如くである。對馬には十六種の哺乳類を産し其の内對馬特産のものにツシマモグラ、ツシマヒミズ、ツシマヒメネズミ、ツシマカヤネズミ、ツシマテン、ツシマクロアカカウモリの六種があり、對馬と朝鮮とに産し内地に産しないものにヤマネコ、シベリアイタチ、カウライネズミの三種があり、對馬と内地とに産し朝鮮に産しないものにアカネズミ及コキクカシラカウモリの二種がある。上記の對馬特産種中五種のは九州に近似亞種あり、又特産種中四種のは朝鮮に近似亞種がある。之等から見ると其の分布が九州朝鮮兩者の混系であることを示す。對馬の鳥類は七十五種あ

つて、其のうち對馬特産にはツシマモグラ、ツシマイソヒョツシマヒガラ、ツシマカケス、ツシマミソサザイ、ツシマハシブトガラスの六種があるけれども其の總ての近似亞種は朝鮮と九州とに産する。對馬と朝鮮とにあつて内地に産しないものにはキタダキ、オホカラモズ、カササギ、カラシラサギカウライキジの五種があり、對馬と内地とに産し朝鮮に産しないものにズチバヘ、カラスバトの二種がある。以上のうちキタダキは世界に於て朝鮮と對馬とにのみ産する珍種である。要するに其の分布は内地よりも朝鮮に近いのを示してゐる。對馬には兩棲類が六種あつて、其のうち特産種はキタツシマサンシヤウウチ、ツシマサンシヤウウチ、ツシマアカカヘルの三種であり、第一と第三の近似亞種は朝鮮にあり、第二の近似亞種は九州に産する。對馬と朝鮮とに産し内地に産しない兩棲類はアカハラカヘルの一種で、對馬と九州とに産し朝鮮に産しない種類は一つもない。故に其の分布は朝鮮に近い爬蟲類については對馬には内地系のマムシ、朝鮮系のアカマダラヘビ、スベトカゲありて爬蟲類の調査は未だ不充分ではあるが矢張り混系であつて然かも朝鮮に近いことを示して居る。

最後に内鮮兩陸分離の時代及其の狀態を論ぜんに、濟州島の動物分布は全然朝鮮系で九州とは縁の遠いものであるから濟州島と九州との陸地分離は餘程以前に行はれたもので、夫れから遙か後になつて濟州島が朝鮮半島から分離したものと云へる。濟州島の南側西歸浦附近に第三紀鮮新期の海成層

新著紹介

○古風土記逸文

栗田寛纂訂 大岡山書店發行
三圓五十錢、四六判三八六頁

故栗田先生の古風土記逸文は大正十二年の震災に絶版になつてゐたのを、今度大岡山書店で再刊するや、讀みをつけ、引用書目解題と索引とをつけた外に、猶二三の補遺が附加されて、宮地博士の推獎の辭がのつてゐる。古典を研究する上からでなくて、我國の人文地理を研究するものにも、誠に必讀の古書である。予はこの書を出版した大岡山書店に敬意を表したい。(藤田)

○Richard Ambrom: Methoden der angewandten Geophysik, 1926 ¥8.25

地球物理学の進歩は近年に於いて甚だ目覺しいものがある而して今や諸々なる機會は最早や試験の時代を過ぎて各種の科學に實際上の貢獻をなしつつあり、殊に重力偏差の測定や電氣探鑛法の如き實用の時代に入り我々の實生活に對してすら貢獻せんとして居る。本書は各科學の最近の進歩を記述する事を目的とせる高級なる自然科學叢書の第十五巻であつて地球の内部の構造が地表の重力に及ぼす影響、地磁氣の測定法、放射能及空中電氣の測定法、地球電氣の測定法、地震波に依る地球内部構造の研究及び地球内部に於ける溫度の分布と其の測定法に就いて、一々現象に對する理論と最近の測定

があることから見れば、こゝは鮮新期に於て既に海となつたことを證するものである。然るに對馬の動物は内地分子と朝鮮分子との混系から成るものなる故濟州島と九州との間が海となつた後も尙接續して居て朝鮮分子の南下したのもあれば九州分子の北上したのもあつて兩者の交通路となつたことを示して居る。この對馬を通じての内地と朝鮮との陸續きは幅が狭かつたことは其の時代に既に濟州島と九州との間は海となり又一方日本海も夫れから前に成立してゐたことから考へられる。日本海成生に關しては咸鏡北道吉州及島根縣那賀郡國分寺の第三紀鯨骨化石や江原道東岸の第三紀汀線によつて窺知される。故に此の交通路は地峽狀を成して居て、第三紀末の氣候の激變により朝鮮分子が南下し次に氣候が恢復すると共に九州分子が北上し未だ充分北上し終らないうちに臺岐と對馬との間が海となり、夫れより間もなく對馬と朝鮮との間が海となつたものと推斷される。而して内地が朝鮮から分離して島嶼化したのは矢部氏に従へば第三紀末又は洪積期の始めて敷島隆起時代の地塊運動によるとされる。これより類推すると、濟州島と九州との間の海は敷島隆起時代より以前乃ち瑞穗沈降時代のものであらう。兎も角動物分布の近遠關係は朝鮮海峡に百米同深線を入れた地圖を見れば一層明かとなる。(N)